NRU
国労せんだい
こくろうせんだい FAX版
号外
2011年4月14日
発責　橋本 昭二
編責　武田 昌仙

東日本大震災

巨大地震直後の体験

山下駅　山田芳夫さんの手記

無念と希望の一夜

3月11日14時46分地震発生

発生当時、私は駅事務室内で業務中であり、驚いて下りホームに出た。

中ホームに女性1名（根津谷さん）がいたので声をかけながら、地震が収まるのを待って駆け付け駅前広場に案内した。

余震が続けて数回あり、そのまま駅前広場に待機していた。

15時頃だと思うが、タクシーの運転手さんから「津波が来る。6メートルから10メートルらしい」と教えられた。

駅舎に戻り、岩沼駅にその旨を連絡したところ、駅長から現金を金庫に入れて避難するよう指示をされた。

私は締切金を金庫に入れ、着替えと自分のバックを持って外に出たが、窓口の現金を金庫に入れるのを忘れたことに気付き、もう一度戻り、現金を金庫に入れた。

またセイフティーボックス（個々人の貴重品入れ）の私物、ジャンパーを持って外に出た。

15時過ぎ、駅前にいつも訪れるおばちゃんに「津波が来るらしいから直ぐに逃げてください」と声をかけた。

また軽ワゴンでやってきた、駅前のパン屋さん（トマト）の方から、「どこに避難すればよいのか」と聞かれたので、橋本商店の方に尋ねたところ、「小学校になっているけど、役場の方が良いと思う」との返答であった。

「駅員さんも一緒に乗って」と言われ、また途中に安住電機の方3名も同乗し、一緒に山元町役場に向かった。

15時20分頃、役場に到着。

役場にはテントが張られ、徐々に町民の方が避難してきた。

16時過ぎ、役場から海の方を見ると、遠方に津波が見えた。

役場は避難してきた人たちで混雑してきた。携帯電話が繋がらず、どうにかメールだけは可能な状態であった。バッテリーが弱ってきており大切に使用した。

避難してきた方々の確認が行われていたが、「ふじ幼稚園」の子供たちと連絡がつかない状態であり、保護者の方が、「どうにかしてほしい」と訴えていた。

19時過ぎ

暗くなってきてから、自衛隊のトラックが到着した。

また、ふじ幼稚園へ状況を確認に行った保護者の一人から、「園児は数か所に分散して避難している」と連絡があり、自衛隊のトラックで救出に行くことになった。

自分も含め、大人5～6人だったと思う（自衛隊の運転手と助手が同行）。

途中、瓦礫や樹木などを退けながら進むと倒れている人がいて、60～70歳くらいの男性だったが既に亡くなっていた。

近くに救急車がいたので報告し、先を急ぐ。

散乱する車と瓦礫で進路を阻まれたため、車を降り、膝まで水に浸かり約1キロを徒歩で行く。

分散して現場へ向かう途中、子供たちが避難しているという場所の近くに「車に取り残されている人がいる」という情報を得て救出に向かった。

声掛けをしながらその方へ行くと、車内にいる女性を発見した。「車に乗って逃げようとして、流されてしまい、ここまで来た」と話をしていた。

またその近くの民家の2階に女性が一人いて救出を行った。

この女性も車で流されてきて、偶然車が3台重なったときに脱出し、民家の2階にたどり着いたという。

この2名を連れて、子供たちが避難しているという民家に到着した。そこには子供たち18名（1名死亡）がいて、玄関には女性保育士一人の亡骸があった。

結局、一晩そこに居たのだが、着の身着のままやってきたせいもあり、とても寒い夜だった。

役場の本部から5時半から救出活動を開始すると連絡が入った。

3月12日、7時頃に別の自衛隊のトラック数台が到着した。我々は周辺の家々に声を掛け、安否確認と救助活動を行ない、無事でいた数人をトラックに乗せて役場に戻った。その後、役場で私を探しに来た同僚と合流し、亘理駅に到着した。

今回の巨大地震直後の状況を簡単に報告したが、こうしたことは多くの仲間が体験したことだと思う。被災された方々にお見舞いを申し上げると共に不幸にもお亡くなりになられた方々には心よりお悔やみを申し上げたい。